

八重山歴史研究会報

第 31 号

編集・発行 八重山歴史研究会
発行日 二〇〇六年一月二二日
事務局 飯田
得能(市史編集課 581-1252)
題字 坡名城泰雄氏

墓に関する最近の研究

公開シンポジウム「琉球弧の墓」を中心に

島袋 綾野

これまでの墓研究は、民俗学を中心に進められてきた。しかし近年、遺跡として墓を捉え、調査する事例が増えてきたこともあり、考古学から見た墓の研究が進んできている。特に、最近のシンポジウムの開催や論集の発刊を推し進めた要因は、浦添市教育委員会が実施した浦添ようどれの発掘・復元事業だろう。この調査により、浦添ようどれの築造は放射性炭素年代測定などから『琉球国由来記』の記載を裏付け、咸淳九(一二七三)年とするのが妥当で、その後、尚巴志時代に改修されたことが科学的に確認された。二〇〇三年二月二五日には浦添市教育委員会主催でシンポジウムが開催され、翌年、報告書『墓からわかる家族の歴史』が刊行されて

いる。また、去る二月一七日には、琉大史学会が墓がテーマに取り上げて公開シンポジウムを開催し、考古学・史学・民俗学の立場から報告があった。以下に紹介する。

【琉大史学会公開シンポジウム】

二月二七日土曜日開催された琉大史学会では、はじめに金城善氏による基調報告があり、沖縄本島南部の墓を中心に紹介があった。その後、考古学の呉屋義勝氏、歴史学の豊見山和行氏、民俗の上江洲均氏の報告が続き、最後に比嘉政夫氏、安里進氏も加わり、津波高志氏のコーディネートでイスカッションが行われた。

基調講演 「再生する沖縄の墓」金城善氏

金城善氏は、「再生する沖縄の墓」と題して、首里城友の会の史跡巡見に利用されたパンフレットを紹介しながら、沖縄の墓の大半は個人墓ではなく、門中墓や家族墓といった死

者を何度も葬り続ける墓だと主張した。また、銘書の調査などから分かる、集骨や所有者の変更等による厨子の移動、または、合葬池を作ることなどによる内部構造の変更、屋根形態の変更等、ひとつの墓でも時代のニーズによって形を変えていくということも指摘した。

シンポジウム報告 1

「考古学からみた近世墓について」 呉屋義勝氏

呉屋氏は、小川徹氏や上江洲均氏の指摘する近世墓の変遷を、考古学的な知見で検討することを目的として発表した。石灰岩地帯と非石灰岩地帯との地域差が存在すると指摘し、洞穴墓、崖墓、掘込墓、亀甲墓、その他の墓式に分けて史料を紹介しながら報告を行った。

この中で沖縄本島周辺では近世における洞穴墓の明確な調査例はないとしながらも、洞穴墓が最も古い形態である可能性を示唆し、洗骨は崖墓の段階で行われた可能性を指摘した。そして、掘込墓の段階で、墓の内部にシルヒラシを設ける事例があることも併せて指摘した。また、亀甲墓については、眉の比高で新旧の系列が分かれるという事象をあげた。地方村落における亀甲墓受容年代については、久米島や宜野湾の例から一七世紀末〜一八世紀初頭であるとの見解を示した。呉屋氏の近世墓の概念モデルを以下に転載する。

【考古学からみた近世墓の「概念モデル」(試案)】

墓式要素	墓式分類	洞穴・ 崖墓	崖墓		掘込墓		掘込墓		亀甲墓
			壁墓	半密閉	全密閉	掘込墓I	掘込墓II	合葬池	
内	墓室	?	○	○	○	○	○	○	○
碑	表道	×	×	×	×	○	○	○	○
施	欄	×	×	×	×	○	○	○	○
設	シルヒラシ施設	×	×	×	×	○	○	○	○
備	墓庭	×	×	×	×	○	○	○	○
設	三宗台	×	×	×	×	×	○	○	○
	屋根意匠	×	×	×	×	×	×	×	×
装	専用木製椀骨器	?	?	?	×	×	×	×	×
骨	転用掘込墓骨器	×	○	○	○	○	×	×	×
器	専用陶製椀骨器	×	×	?	○	○	○	○	○
副	貝殻	?	○	?	×	×	×	×	×
葬	埋骨既在	×	×	×	?	?	○	○	○
造	一次葬骨既在	?	?	?	×	×	×	×	×
骨	再葬骨既在	?	○	○	×	×	×	×	×

凡例 ○：有る、△：有る場合と無い場合がある、×：無い

ただし、この変遷は沖縄本島および周辺離島に適用されるものであると思われる。八重山諸島においては、近世以降も土壙墓があり、洞穴・岩陰埋葬も存在する。墓の形態伝播の問題も踏まえつつ、八重山諸島の墓を議論する必要があるだろう。
(註：島袋)

シンポジウム報告2

「墓をめぐる首里王府と琉球社会」 豊見山和行氏

豊見山氏は首里王府によつて展開された墓と葬礼にテーマを絞つて発表した。五つの項目を挙げていたので、資料から引用する。

第一に、近世における葬礼について、「羽地仕置」の葬礼規定（一六六七年）を検討し、その後の葬礼に関する法令の転回点になつたことを検討する。

第二に、一八世紀前後における墓地規定の問題を「諸間切法式帳」（一六九七年）および「仰渡写」などから検討する。

第三に、一八世紀以降、王国末期まで展開された王府の墓および葬礼に関する法令を検討する。

第四に、王府の推進した儒教化政策と墓制との関係について。

第五に、農耕禁忌と葬礼との関係を与那国島の例から検討する。

各項目について、古文書の墓の記載を紹介し、墓について首里王府の政策が深く関わっている例を挙げた。古文書が残るといふ条件の問題はあるが、これらの古文書の記載は先の呉屋氏の指摘も含めて、一七世紀後半から変化を促進させる

きっかけがあつたという根拠的資料であると言える。

シンポジウム報告3

「民俗学からみた沖縄の墓」 上江洲均氏

上江洲氏は民俗学からの視点で、墓の変遷試案をしているので、その部分を資料から引用する。

風葬は、その後の「洗骨習俗」に結びつきやすい位置にあつたことはたしかである。中国南部では、土葬からの改葬（拾骨）であるが、韓国では「草墳」の後の改葬である。しかし、普通には土葬の場合は、そこで終了となる「単葬」である。風葬後の改葬は、「洗骨」というが、いわゆる「複葬」である。風葬の方は、葬所を藪の中や岩陰（洞穴）からさらに人工的な横穴や亀甲墓・破風墓のような石造建造物へと進む。

琉球諸島での「墓」は、自然の洞穴から石垣と木戸（石戸）を設けた墓へ、さらに土手の横穴掘り込み（フィンチ墓）、野面積みによる石積み（チンマーサー墓）、そして丘を背に築かれた亀甲墓（カーミナクー墓）や破風墓（ハーフー墓）へと変遷したと考えられる。

この報告を略記すると、

自然洞穴 自然洞穴に戸（目隠し）等を設ける 掘り込み墓 野面の石積墓 亀甲墓 破風墓

という変遷が述べられている。
 なお、上江洲氏は史料を墓に墓の変遷について、次の表を

作成しているの、ここで紹介する。

葬法・墓

(単葬)	(複葬)
・安座間(宜野湾) ・木綿原(読谷)	・2500年前 クマヤ洞穴遺跡(北谷) ・安座間(宜野湾)
・1462 火葬 ・1479 <u>崖葬墓(与那国)</u>	・1462 火葬...(<u>掘り込み墓</u>) ・1501 洗骨 ・1501 玉陵(内部は掘り込み墓、外部は破風墓)
・1534 洗骨(<u>板戸墓</u>)	・1670 喜名焼銘入り厨子甕 ・ <u>池城墓(今帰仁)</u> ・1684 <u>幸地腹墓(洗骨)</u> ・1687 <u>石墓(伊平屋島)</u> ・ <u>伊江家墓(唐墓)</u> ・1696 拾骨(埋め)・・・(雨乞い) ・1697 掘り込み墓(屋根破風)(久米島) ・1701 <u>亀甲墓(袒形)(久米島)</u> ・1704 個人墓 一門墓へ(八重山) ・1718 <u>亀甲墓(久米島)</u> ・1721 葬 のち 焼骨 ・1736 焼骨
・1721 火葬	・1753 <u>亀甲墓(久米島)</u> ・1765 <u>亀甲墓(渡名喜島)</u> ・1768 墓地制限(八重山) ・1809 <u>庶民墓(六間角)</u> ・1831 洗骨 数回(久米島嘉手苺) ・1840 拾骨(埋め)・・・(雨乞い)
・1765 埋葬(水納島)	・1857 墓地制限(八重山) ・1865 洗骨習俗(宮古)
・1855 埋葬(伊良部佐良浜)	
土葬(埋葬)・・・特殊葬(近世 ~ 近代)	・納骨小屋(北部) ・1920(大9)小屋墓(ムラバカ)廃止(久志)

(註筆者)

この表の墓になったのは、浦添市教育委員会主催で行われた近世墓シンポジウムの報告書『墓からわかる家族の歴史』に掲載された玉城順彦氏の報告である。

玉城氏は八重山諸島の葬制についても論考があり、規模帳と墓域の問題等も指摘している。なお、玉城氏の論考等を以下に紹介する。

玉城順彦 1989「史料に見る沖縄の葬墓」『シンポジウム南島の墓』 p206-p236 (有)沖縄出版

玉城順彦 1996『近世先島の生活習俗』おきなわ文庫76 ひるぎ社

玉城順彦 2004「沖縄の葬法の変遷」『墓からわかる家族の歴史 近世墓シンポジウム報告書』浦添市文化財調査研究報告書 p13-p20 浦添市教育委員会

デイスカッション

以上のように、発表要旨を簡単にまとめたが、先島に関する報告が皆無に等しかったのが残念である。ただし、デイスカッション等を通して、今後の八重山での葬制を考える上でよい資料になると思われる事例を紹介する。なお、デイスカッションは、先述のように比嘉政夫氏、安里進氏も加わり、津波高志氏のコーディネートで、フロアからの質問用紙をもとに、津波氏が各報告者に質問していく形式で行われた。

やはり質問として多かったのは、洗骨の開始期についてである。琉球における洗骨の開始は未だ不明であるが、現在確認されている例で最も古いのは、浦添ようどれである。これは一四世紀と考えられる資料である。筋が残った状態つまり、腐りきらないうちに洗骨したものと考えられている。また、この骨のDNAが南中国と関係あるという結果も得られており、琉球における洗骨のルーツが明らかとなりつつある。

また、「洗骨を目的とした」風葬の開始についても初現は難しいが、那覇市のナカンダカリヤマ古墓群が一四世紀～一五世紀と考えられている。これらのことから、首里と関係する墓では、一四世紀頃からいわゆる洗骨を目的とした風葬が、葬法の一つとして広く行われていた可能性が高い。

また、安里進氏からは、「近世墓とは何か？」という基本

に立ち返るような質問もあった。それは、近世に限り利用されていた墓ではなく、近世に変化を伴う墓である、という考えが妥当であろう。また、「白川氏十四世友利首里大屋子恵當」の事績（一七六六年）の水納島に墓はないけれど方々に埋葬しているという記載が見られることから、「墓とは何か」という概念に関する質問が津波氏からもあった。これは今後、八重山諸島の墓を考える上で概念をまとめるべき課題である。次に八重山諸島の墓について、私見を述べる。

【八重山諸島】

八重山諸島の墓については、森田孫榮氏の論文がある。先述のように琉球大学史学会のシンポジウムでは、八重山諸島の資料紹介は少なかった。ここでは遺跡での出土状況を中心に紹介する。

旧石器時代

八重山諸島の旧石器人骨で明確な報告はない。白井祥平氏によつて、「米原人」が報告された例があるが、詳細不明なので紹介にとどめる。また、旧石器人骨で有名な港川人の骨はフィッシャー（裂け目）堆積物中からの出土であり、その他の洞穴人については人骨が小破片であるため、明確な葬法は不明である。ただし、港川人骨には複雑な骨折をした痕跡

などがあり、フィッシャー上方から、投げ込まれた可能性も指摘されている。

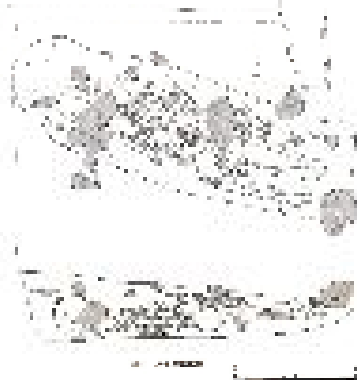
先史時代

下田原期出土の人骨は未だ発見されていない。また、無土器期についても、明確な報告はない。しかし、興味深いのは、無土器期の名蔵貝塚群の調査において、獣骨などと「一緒に」ヒト」という報告がある。未攪乱層からの出土ではなく、新しい人骨である可能性も捨てられないが、もし、先史時代の埋葬人骨が後世の攪乱によって混じったのであれば、唯一の先



大泊浜遺跡出土の埋葬人骨

安里進・春成秀爾編2001『沖縄県大泊浜貝塚』考古学資料集27 国立歴史民俗博物館 春成研究室



史人骨の出土例となる。

現時点で最も古い人骨と確認できるのは、波照間島大泊浜貝塚(二〇〇一年報告)出土の人骨である。報告書によれば、土壙墓に埋葬された一世紀〜二世紀の人骨で、そうであれば、無土器期の終焉に位置する人骨である可能性が高い。この人骨の葬法は、伏臥屈葬で骨盤の右側には新生児が埋葬されていた。

歴史時代

ついで、大泊浜貝塚(一九八六年報告)・ピロースク遺跡出土の人骨である。これらは仰臥屈葬で、一二世紀〜一四世紀頃と考えられる埋葬人骨である。その他、蔵元跡後方砂丘遺跡(仮称)やフルスト原遺跡、通称二号線で出土する



大泊浜遺跡出土の埋葬人骨

沖縄県教育委員会 1986『下田原貝塚・大泊浜貝塚』沖縄県文化財調査報告書第74集

人骨は、一五世紀前後のものと考えられている。これらは稀に石垣墓が見られるが、多くは土壙墓であり、居住空間に隣接しているという点が特徴として挙げられる。

この時期の葬墓制を知る上で貴重な史料に、「成宗実録」がある。成宗一〇年の与那国島の記載を見れば、人が死んだら崖下に棺を置き、土を被せず、崖下が広ければ五・六棺は並べるとのことである。改葬の有無についての記載はないが、いわゆる岩陰墓・崖葬墓と呼ばれる葬法である。この葬法は、二次葬になることが多い。それは、先述の沖縄本島周辺の葬法に見られるように、同じ場所を何度も利用するため、骨を動かすという行為が生じるからだ。しかしながら、ここでいう二次葬は墓を再利用する段階で動くのであり、厨子を利用した改葬を意識して動かすものとは異なる。この岩陰墓は、木製棺を伴ったり、簡易に土砂を被せ、置石するだけなど乾燥葬に近い。実際に、西表古見などに、この時期のものと考えられる岩陰墓が残っている。

この時期は、先述のように墓域と居住地が隣接して発見される例が多い。屋敷内に墓を作る例を、時代は異なるが名嘉真宜勝氏が沖縄本島南部を中心に事例を報告している（ただし、近年、墓を開けたところ人間以外の骨が多いということも分かっている。儀礼的墓の可能性が高い？）。これは、屋

敷墓と呼ばれる類のものであり、石垣市内では現在でも、骨はないが屋敷内に墓を残している家がある。また、登野城での聞き取りでは、戦前まで、童名で呼ばれているうちに子どもが死んでしまうと、屋敷内に穴を掘って埋めたという話もあった。生後一週間以内に死亡したチムラシ（血塊）について同様な例があり、森田孫榮氏も論文中で報告している。これらを踏まえた上で遺跡から出土する人骨を見ると、柱穴と埋葬地とがほとんど離れていない。土壙墓の中の土砂（つ



ピロースク遺跡における遺構・石積と人骨との関係
石垣市教育委員会 1983 『ピロースク遺跡』石垣市文化財調査報告書第6号

まり、埋めるときに利用された土砂）が、周囲の包含層の土砂とほとんど時間差がないと考えられることから、日々の営みが行われている空間に隣接したところで埋葬されたと考えられる。沖縄本島に

ある屋敷墓と八重山諸島にある屋敷墓は別物か？仲松弥秀氏は『古層の村 沖縄民俗文化論』や講演録をまとめた「沖縄の聖地と葬所」に次の事例を紹介している。

(前略) 古代の習俗として、屋敷の裏(家裏としてもよい)に人を葬ったと考えることもできる。村落単位で見れば、その村落に接した裏側となるが、古代にこのような習俗が少なくとも沖縄にはあったことが調査によって明らかにされる多くの事実がある。そのもつとも好例として、近々二〇年前まで、八重山の新城島では死人を家屋裏に葬ったということだけを述べておく。(『古層の村』より)

そこでは戦後まで、家の裏、屋敷の内部に祖先を葬ったといっております。(中略)そこで私は「墓の上が開いたままでは困ると思うが、草木を持ってきてとんがり帽子みたいな屋根をつくっていたのではなからうか。」答、「それとおりだった。」私、「それなら臭かったらどうな」答「祖先の臭いがなんで臭いか、かえっていい臭いだ。」(中略)屋敷内の墓は戦後まであったと言っておりました。元家(ムートウ屋)の家々だったといわれ、今は野原の新墓に移したとのことでした。(「沖縄の聖地と葬所」より)

墓の形態はヌーヤ墓に近いが、いわゆる屋敷墓の事例である。なお、『古層の村』の発刊は一九七七年である。今後は、こ

のような屋敷墓的なものがいつ頃まで遡れるのか、近世以前の屋敷墓につながるのか、また、集落では立地等、何らかの要因に起因するものなのかも検討する必要があるだろう。

近世

近世になると、葬法にも少なからず変化が見られる。ただし、古い葬法も残るので、パターンが増えるということでも理解頂きたい。近世の墓というと、乾燥葬が浮かぶ。つまり、岩陰墓や洗骨を伴う掘込墓などである。しかし、近年の調査から、近世以降にも複数の事例で土壙墓など湿葬が残ることが分かっていく。野底遺跡では真鍮製簪を挿した人骨が土壙墓から検出されている。これらが最終埋葬であるのか、先に紹介した上江洲氏がいうように、湿葬 改葬を伴うものであるのかどうか、今後の検討が必要である。しかし、このような葬法が近世まで残っていることは確認できる。

先述のように乾燥葬が増えるというのも近世の特徴である。カラ岳北東の墓は個人墓であり、乾燥葬である。これは、板石で周囲を囲い、ピーチロックで蓋をするタイプで、歴史時代に蔵元跡遺跡などで確認される石積墓が湿葬なのに比して、同じように周囲を石で囲い、蓋をするタイプでも乾燥葬である。また、国分直一氏も復帰前後の八重山諸島で、半地下もしくは地上墓となる乾燥葬の墓を紹介している。



カラ岳北東の墓 個人墓で灰釉碗などが副葬されている

いる。洞穴口左側にはノッチの段差を利用して遺体を寝かせており、さらに洞穴奥は合葬池のように骨が散乱している状況であった。中森式土器のほかパナリ焼も出土していることから、人骨がいつの時期に属するものなのか特定するのは難しいが、パナリ焼が厨子ではなく複数の事例で墓に副葬される例もあることから、近世になって墓として利用された可能性が高い。波照間島の庸原第一墓は沖縄県立博物館が調査を行ったが、岩陰を利用した囲込墓で、近世から近代にかけて

さらに、最も増えるのは岩陰墓や囲込

墓、掘込墓である。岩陰墓は大きく二つの

パターンに分かれる。一つは、改葬を意識せずに岩陰を利用するもの、もう

一つは改葬を意識して岩陰を利用するものである。川平大高

岩陰遺跡では、複数の人骨が見つかった

の遺物が出土している。土肥直美氏が人骨を同定しており、家族墓の可能性を指摘している。また、西表島上原に残る墓は囲込墓である。一九九二年～一九九三年に竹富町教育委員会によって調査されており、上原村の墓だと考えられている。陶磁器やキセル、簪などが出土している。こちらも土肥氏が人骨を同定している。

他に、平地に人頭大もしくはそれより大きな石を組んでピッチロックなどで蓋をした石組墓も増加する。近世のこのような墓は、土壙墓と違って複数葬であり改葬を伴うということが最大の相違点である。

これらのことから、八重山の墓の変遷について、次のように試算した。先述のように、あまりにも多彩であるために、変遷図には組み込まれていないパターンもある。さらに、初期近世墓がどのようにニューヤ墓やイシ墓、キチ墓・キンス墓等に変遷したか、という点では、もっと民俗知識の追加が必要である。

八重山諸島における墓の変遷試算

└ 一一世紀（大泊浜遺跡）

砂丘地：土壙墓：伏臥屈葬：居住空間に隣接 貝殻を副葬
岩陰墓については不明

└ 一二～一四世紀（大泊浜遺跡・ピロースク遺跡）

砂丘地…土壙墓…仰臥屈葬

石灰岩台地上…土壙墓…仰臥屈葬…居住空間に隣接 屋敷
囲石積の内外

一四世紀～一六世紀（フルスト原遺跡・石垣貝塚・古見古墓
等）

砂丘地…土壙墓・石積墓（湿葬）…仰臥屈葬…居住空間に
隣接した例あり

石灰岩台地…土壙墓・石積墓（湿葬）…仰臥屈葬…居住空
間に隣接 屋敷囲石積の内外

岩陰部…岩陰墓（乾燥葬）…目隠しなし…二次葬が見られ
る…居住空間から分離 陶磁器や土器が見られる

洞窟利用型？…ヤドウピケーの例が考えられるが、浦添よ
うどの例などから、後世に形を変えた可能性もあるため、

「？」を付する 周囲からは土器が採集される
一七世紀前半？（喜田盛遺跡）

砂丘地…土壙墓（湿葬）…居住空間に隣接？
一七世紀中盤～一九世紀（カラ岳北東・野底遺跡・フルスト

原遺跡岩陰墓・その他の近世村跡）
土壙墓（湿葬）…仰臥屈葬…居住空間と分離

平地式…積石墓・板石墓（乾燥葬）…一次葬・改葬両例あ
り…居住空間から分離 碗や皿・簪・煙管といった副葬品

が増える 又ーヤ墓・イシ墓へ？

岩陰部（乾燥葬）…目隠しなしの例もあるが石を積んだ囲
込墓が増える…二次葬・改葬・洗骨が見られる…シルヒラ
シを設ける例あり…居住空間から分離 キチ墓・キン

ス墓へ？
割り墓（乾燥葬）…改葬墓・シルヒラシを設ける例あり…
居住空間から分離 西表島網取など、石灰岩がなく砂岩地

域に多い墓…基本的には岩陰墓や囲込墓の系統 キチ墓
・キンス墓へ？

以上、大まかにまとめた。副葬品については、一一世紀～一
六世紀が、貝や置石なのに対し、近世になると完形の陶磁器

や土器、キセル、簪といったものを入れるようになる。また、
近世の墓は、一八世紀後半がキーポイントで、この頃から厨

子が増え始め、パナリ焼の転用が始まると考えているが、現
在のところ資料分析が進んでいない。あわせて、遺骨を墓内

に寄せるだけの二次葬から明らかに頭骨や四肢を分ける例が
見られるこの時期に、八重山においては洗骨が始まったと考

える。
なお、和宇慶墓やハンナー主の墓など、特殊な形態の墓が

存在する。おおよそ一七世紀の年代が与えられているよう
である。和宇慶墓については、建築技術の問題から、一七世紀

という年代は疑問である。先に紹介した呉屋氏発表の「亀甲墓の地方での受容」という問題では、久米島の例が挙げられる。一七〇一年もしくは一七〇五年に建造されたとする墓である。写真に示す亀甲墓の祖型とされるこの墓は、上江洲家管掌で、「木のさく原墓」と呼ばれるものである。家譜によれば、「雨漏りがあるので屋根の土を石粉にかえた」という。また、墓口のアーチについても、八重山諸島におけるの建築物に登場するのは、古い特徴ではない。和宇慶墓は屋根に至るまで漆喰で固められている。地方への文化伝達スピードや規制を整理した上で、伝承による築造年代が正しいのかどうか、検討すべきだろう。墓内部の状況や周囲の発掘調査などから、後世の修復及びリフォームの痕跡



木のさく原墓（久米島）久米島における初期亀甲墓と言われる

が見つかる可能性を考えている。いずれにしても、築造年代について確固たる証拠がないため、現在見られる形態が一七世紀であるという実証が難しい墓である。

なお、石垣貝塚には石組墓という墓が存在するが、同墓の帰属年代については疑問を持つるので、ここでは扱わなかった。

【特殊葬】

特殊葬については、聞き取り等による紹介がいくつかある。先に紹介した屋敷内への幼児埋葬もひとつの特殊葬になるかもしれない。特殊葬として最も取り上げられるのは、海難事故等不慮の事故で亡くなった人、もしくは集落外の人の場合である。この場合には、墓に入れることができないので、海浜地に埋めたというものである。砂丘遺跡で埋葬人骨が出土すると、この指摘を受けることが多い。

歴史時代では唯一の火葬骨として報告されている、石垣貝塚石組墓の例は、近世墓と考えた場合でも類例が無く、特殊葬と言えるかもしれない。

参考【沖縄諸島の先史墓制はどう変化したか】

先述のように、八重山諸島ではまだ明確な先史人骨が出土していない。では、沖縄諸島ではどうだろうか。新里貴之氏

は、大隅半島・奄美諸島、沖繩諸島に至る先史墓制を集成し、その結果、具志川島遺跡群等の例から、岩陰等の墓であつても二次葬、一次葬に移行する例があることを指摘した。個人墓の登場である。博論「第 3 章 南西諸島先史時代墓制の研究」より、新里氏の説を紹介する。

沖繩諸島先史時代墓制の画期

1 期（前 期末～前 期後半）

砂丘立地：置石墓 石囲墓：仰臥・伏臥伸展葬

岩陰・洞穴立地：配石状・石棺状・覆石状：仰臥伸展葬：

焼骨

台地立地：覆石墓 出現：仰臥伸展葬

土壙墓は常に別系列として長期わたつて存在する

一次葬・二次葬並存、土器供献、多用種の貝輪、上顎対称

抜歯 1 例

2 期（前 期末～後期 段階）

石棺墓 ・ ・ 出現、土器棺墓出現？

下顎非対称抜歯主流

3 期（後期 段階）

台地立地の消失

礫石多用墓衰退

仰臥屈肢葬出現

二次葬の衰退

装身具の衰退

下顎左右対称抜歯の出現

4 期（後期 ～ 段階）

岩陰立地の衰退

新埋葬姿勢の採用？

抜歯衰退？

【おわりに】

新里氏の指摘した沖繩諸島の例や、周辺の台湾等の墓制を見ても、やはり八重山諸島だけではなく、古い時代から全域に多様性が認められる。岩陰墓のようなものと、土壙墓は併存し、数千年前に遡つても、どっちが先かという結論は得られていない。八重山諸島では、未だ先史時代の明確な人骨の出土は認められないが、おそらく多様性のある墓の形態が見つかるだろう。八重山諸島の墓については、先に遺物論からの変遷試案を発表したが、現在、遺構論や立地論から論文をまとめている最中であり、今回は中途半端な発表となつてしまった。今後、自論を整理・報告していく中で、改めて発表の機会を得たいと考える。あわせて、層序や遺構記載の問題から、石垣貝塚の石組墓については、別稿で執筆中である。こちらにも、より具体的な指摘を行いたいと考える。